



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

天の大群が加わり、神を賛美した

主の降誕おめでとうございます。今日は全世界の教会と、主の降誕を祝ってミサをささげています。ふだんわたしたちが全世界の教会とのつながりを意識することは少ないかもしれませんが、今日は全国津々浦々、全世界の地の果てまで、救い主の誕生を喜び合うのです。

まず、マリアが救い主イエスを産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた馬小屋に目を注ぎましょう。どんな家族にとってもそうですが、新生児が夫婦に与えられると、その家庭の中心に置かれるものです。場所的な意味合いというよりも、生活が、幼子中心に回っていくようになるわけです。

このだれもが理解できる自然な姿は、わたしたちに救い主を迎える最後の準備を促します。わたしたちも、救い主・幼子イエスを迎える場所を、わたしたちの生活の中心に用意しなければならないのです。

ここでも、場所的な意味合いというよりも、生活と関わっています。今日わたしが喜んで受け入れた救い主は、生活の中心に置かれようとしているのでしょうか。日曜日の過ごし方を考えるときに、お迎えした救い主を中心に置いて、過ごし方を考えようとしているのでしょうか。それとも最初から、生活の中心に救い主は置かれてなくて、宿屋の外、家畜小屋にしか救い主は置かれられないのでしょうか。

そうではなく、喜んで生活の中心に、救い主イエス・キリストを迎え入れましょう。救い主が必要としていることを優先に生活を組み立て、喜んで幼子イエスのために自分の都合を横に置きましょう。その最初の取り組みは、新生児が安らかに留まることができるための心の温かさや心の静けさを取り戻し、わたしたちがしばしば好む社会の騒がしさから一歩身を引くことだと思います。

さらに、今日の福音朗読の最後には「突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った」（2・13）というくだりがあります。天の大群は数十万、数百万だったのでしょうか。しかしわたしたちキリスト者は、カトリック教会だけでこの地上に12億人とも言われています。すべてのキリスト者を合わせれば、天使の大軍に勝るとも劣らない数なのではないのでしょうか。

そのわたしたちが、全世界地の果てまで「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」（2・11）と賛美の声を上げるなら、わたしたちの信仰の証しは世界を包むと思います。病気や老齢、戦争や迫害などで教会から遠く離れている人もいます。これらの人々にも、今宵御降誕の喜びが身近に感じられるよう、ミサの中で願い求めましょう。